



球磨弁を使っっての大熱演。

**セリフを覚えるのが大変！
村の歴史を球磨弁で演じる**

「おいも百太郎さんと一緒に死にたか」「おれのことお忘れしてくれっ」。若い恋人たち、おみよと百太郎の悲しい別れの場面を溝口カオルさん(七三)と木下亀雄さん(七二)が力演します。『百太郎』劇を演じているのは、球磨郡上村高齢者大学の参加者二十一人で

つくっている、平均年齢七十二歳という皆さんです。

劇団結成のきっかけは、田浦町の「おさい」劇団の芝居を見て、「自分たちも何か出来ないだろうか」と。一方、脚本演出を担当する野尻恵美子さん(六三)も「せっかく上村に生まれただのだから上村の何かを残したい」と、記念碑文や道標を調べては村の史話を書き集めていました。この『百太郎』劇も、江戸時代、堤(上村)の治水工事の人柱になった百太郎の話を劇化したものです。二つの思いと上村という舞台がこの劇を作りあげました。

練習は月に一回。バッチョ笠やワラジなど小道具もすべて手作り。最近では他の町にも呼ばれて公演し、「観客を泣かせている」とか。でも、反省会では「あそこところがようなかったばい」と、演技についての厳しい意見が飛び交います。

夢は？「県立劇場で演じること。わっはははは」。木下さんが元氣よく答えました。

高齢者にとって



新しいことに
挑戦し
心ときめかす

**地元の情報素早くキャッチ。
熊本の隅々を楽しむ若者たち**

通称「タンクマ」で親しまれている「タウン情報クマモト」は、発行部数四万二千部を誇る月刊誌。高校生から二十代前半の若者たちに圧倒的な人気を誇っています。

載っているのは、熊本のうまい店やドライブコース、街角のこぼれ話、学校紹介などなど。あらゆる素材を、熊本ならではの情報に変えて提供しているのが特徴。「若者は大人のように外国や都会へ行くことができないから、地元で楽しむという気持ち強いのだと思います」と岡田美樹編集長(二六)。「タンクマ」に載った店にすぐ出かけてみたり、ドライブしてみたり。「反応は早いですね。若い人は動きが早いんです」

中には、「町で見かけた面白看板や面白オジサン」など、逆に、イキイキとした情報を読者の方から寄せられるコーナーもあります。つい見落として

しまうような小さい情報も、彼らは「地元を楽しむ」材料に変えてしまうようです。熊本の町の隅々にまで若者たちはアンテナを張り巡らし、タウン誌を媒体として、その情報交換を楽しんでいるのかもしれない。

九州の中でも発行部数のトップクラスを走る「タンクマ」は熊本を楽しむ若者によって支えられていると言えます。



阿蘇郡久木野村アスペクタに集まったバイク大好き若者たち。

自分の町の
楽しみを
つくりだす

特集 楽しむ

あなたの楽しみは何ですか？
「うふふ」「あはは」「ほほほ」。心奪われてドキドキしたり、ニンマリほくそ笑んだり。熱中できる「楽しみ」こそ生きる喜びですね。それでは、くまもとを十分に楽しんでますか？今回は、「若者たち」「子供たち」「女性」「高齢者」「働く人々」「障害者」「県民」のみなさんがイキイキと楽しんでいる様子を紹介します。くまもとに暮らす楽しみを考えてみましょう。

**「お話って面白い」。イキイキ
した子どもの笑顔が楽しみ。**

今年「熊本子どもの本の会の研究会」が発足して十年目。本が大好きな主婦が一人で始めた文庫活動が今、母親たちを中心に大きく広がっています。

同会の主宰者、横田幸子さん「熊本市西原は、二十年前「子どもがたくさんの本と触れ合うチャンスをつくりたい」と、自宅に「びわの木文庫」を作りました。それから十年。文庫活動の中から「子どもにとって本当にいい本とは？」という疑問が湧いてきて、今度は「いい本探し」の勉強会を開きました。それが同会の始まりです。

同会は、「昔話を楽しむ九州交流会」に参加したり、他の文庫とのネットワークを広げていくなど積極的に活動する一方、読み聞かせの実習や宮沢賢治の読書会などを行っています。現在、会員は百二十人。ほとんどが子育て真っ最中の三、四十代の母親たちです。「本は楽しいってことを子どもたちに

伝えていきたいのです。そして、若い後継者がどんどん育ってくれることが私の願いです」と横田さん。

木曜日の午後、子どもたちが一人二人と「びわの木文庫」を訪ねてきました。横田さんはやがて昔話を語り始めます。じつと聞き入る子どもたち。もうすっかり昔話の世界です。そんな子どもたちの表情に横田さんの顔もほころびます。



手遊びの実習には母子一緒に参加。

女性にとって



子どもたちを
心豊かに育てる
よろこび